



Title	接尾辞「っぽい」「らしい」「くさい」の変化と構文スキーマ
Author(s)	平野, 啓太
Citation	日本語・日本文化研究. 2018, 28, p. 150-161
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71156
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

接尾辞「っぽい」「らしい」「くさい」の変化と構文スキーマ

平野 啓太

0. はじめに

近年「っぽい」についての研究が急速に増えている。それは、元来の接尾辞としての用法(1a)から著しく意味を拡張させ、特に「推量」の意を表すモダリティ助動詞¹(1b)(1c)を派生させているからだと思われる。

- (1) a. 今日のカレー、なんだか水っぽい。
- b. 空の様子を見ると、明日は雨っぽいな。
- c. 彼女がどうやら浮気してるっぽい。 (作例)

しかし、接尾辞から推量のモダリティ助動詞に変化しているのは「っぽい」だけではない。多くの先行研究で指摘されるように近世後期以降にモダリティ助動詞に拡張したと思われる「らしい²」、先行する研究は少ないものの、近年、モダリティ助動詞に拡張したと思われる「くさい」も挙げられる。堀尾 (2015) ではこのような「っぽい」「くさい」の使用を「若者言葉」に分類している(接尾辞としての用法の例は(2a)(3a)、モダリティ助動詞としての用法の例は(2b)(2c)(3b)(3c)を参照のこと)。

- (2) a. あの人の生き方は実に男らしい。
- b. 声の感じから察するに、電話をかけてきたのは女らしい。
- c. 部屋の明かりがついている。息子はまだ起きているらしい。 (作例)
- (3) a. 田舎くさい服装の若者を見かけた。
- b. 明日行くのは、ちょっと無理くさい。
- c. あいつの顔を見ると何かいいことがあったくさいな。 (作例)

これらは、その意味の類似性が指摘される接尾辞であるが、その変化において注目されるべき点は、意味変化だけでなく、名詞や動詞連用形などの語単位の接続から、文(節)単位の接続に形式的な拡張を起こしている点である。

一方で、三宅 (2005) では「ようだ」「そうだ」などのモダリティ助動詞が、形式名詞「よう」「そう」から変化したことが指摘されている。

本稿では接尾辞「っぽい」「らしい」「くさい」において、前接する形式が構文スキーマを介して拡張したことを説明するとともに、同じメカニズムが「そう」「よう」などの形式名詞からモダリティ助動詞への変化に適用できる可能性があることにも触れる。

1. 先行研究

「くさい」以外の「らしい」「ぼい」の研究、特に通時的な視点から推量に至る意味の漸次的な変化を捉えた研究は数多いが、変化のメカニズムについて認知言語学的な視点から分析しようとした試みはそれほど多くない。

なかでも近年、目覚ましく意味拡張を起こした「ぼい」について、上述の視点で変化のメカニズムを説明したものに、ケキゼ (2003)、小出 (2005)、尾谷 (2000、2005、2011) などがある。その中で、特にモダリティ助動詞への拡張について触れている部分を概略すると、以下の通りになる。

ケキゼ (2003) は、「ぼい」を「安定した用法」5種、「新奇な用法」2種に分類し、安定した用法の一つである用法 (用法3: 「YはXっぽい」について、Yは[X]の典型例が持つ性質・属性を話者の暗黙の基準値よりも多く含む (男っぽい、女っぽいなど)) から、新奇な用法の一つ (用法6) である「推量判断」を表す意味が出てくると述べている。

小出 (2005) では、「旧用法」と「新用法」に区別し、「旧用法」から「新用法」への拡張について、対象の属性の表現からモダリティ表現を表すようになったと指摘している。

尾谷 (2000) では、拡張がメタファーによって動機づけられていると述べられている。特に「属性の含有量の多さ」から、「判断可能性の含有量の多さ」 (=推量用法) への拡張には、「Xの属性を多く含む→Xカテゴリーの成員である」というメタファーが働くとして述べている。

三者は、「ぼい」のモダリティ助動詞の用法について、それが元々持つ意味に基づく内的な変化を記述しているが、それについては十分な考察がされていると言える。

一方、形式面については、先に挙げた先行研究のうち、小出 (2005) だけが旧用法から新用法への意味的な拡張に、形態論上の変化 (終止形接続が可能になったこと) が伴うことを指摘しながらも、その変化のメカニズムについては触れられていなかった。さらに、尾谷 (2005、2011) では、言語の拡張について Langacker (1999) が提唱する二つの理論モデル、①Dynamic Usage-based Model と②プロトタイプとスキーマに基づくカテゴリー化を紹介し、これらは「あくまでも意味の拡張に関するものであり、形式は共有されているという暗黙の了解が前提にあるように思われる (尾谷 2005: 22)」と、その不十分さを指摘している。

そして、尾谷 (2005) は、「名詞 (N) + ぼい」が「終止形 + ぼい」への形式的拡張を遂げたメカニズムについて、「類推」という道具立てを以ってそのメカニズムを説明している。

尾谷 (2011) からその説明を引用すると以下の通りである。

接尾辞ポイ構文からモダリティのポイ構文へと拡張した際には、再分析や類推も同時に起こっていると考えられる。接尾辞構文の場合、「ぼい」は名詞や形容詞という語彙に接続していると考えられるが、モダリティのポイ構文では「ぼい」が語彙では

なく節(つまりイベント)に接続していると考えられる。その証拠に、前者ではテンス要素が必ず「ばい」の後ろにつくが、後者では「ばい」の前にテンス要素を付けることが可能だからである。

[_s 彼は[_{AP} 子供っばい]]。
↓再分析・意味拡張
[_s[_{s1} あれは子供(だった)]っばい]。
↑類推(モデル効果)
[_s[_{s1} あれは子供(だった)]らしい]。

(尾谷 2011: 271-272)

尾谷(2011)では、類推による拡張モデルにおいて「ようだ/らしい/みたいだ」が選ばれる理由について、同じ推量の意味を持つ助動詞であったこと、特に「らしい」は形容詞接尾辞の用法を持つため重要な役割を果たしたことが述べられている。

しかし、果たして類推のモデルとして挙げられている「ようだ」「らしい」「みたいだ」はどのように選定されるのだろうか。意味が似ているからということに根拠を置くならば、どの程度似ていれば拡張のモデルとして適格なのかという曖昧さを排除することはできないだろう(例えば、「赤っばい」と「赤がち」、「忘れっばい」と「忘れがち」などは似たような意味を表していると言えるが、「ばい」は「がち」を変化のモデルとすることはなかった)。また、類推の手法はあまりにも具体的にすぎ、本当に「らしい」をモデルに類推が働いたかは疑問が残るところである。

そこで本稿は、尾谷が形式の拡張の説明について用いなかった①、②の理論の中から、Usage-based Model と構文スキーマを用いてこれらの接尾辞の形式的変化の説明を試みる。

2. 文と階層

形式的拡張を説明するために、本章ではまず意味と形式の関係について述べる。

2.1. 形態素の順序

Bybee(1985)では関連性(relevance)の観点から、多言語のデータをもとに、形態素カテゴリの配列について分析を行なっている。傾向として観察された順序についてまとめられた上原・熊代(2007: 186)を以下に引く。

(動詞語根) + 結合価(valence) + 態(voice) + 相/アスペクト + 時制 + ムード + (数・人称・性などの)一致(agreement)

強調しておきたいのは、この順序に類像性という基盤があり、恣意的なものではない、ある程度の必然性を持ったものだということである。

2.2. 日本語における文構造

日本語においても形態素間の順序に規則性は認められる。上に挙げた上原・熊代（2007）は、次のような例を挙げている。

着 | せ | られ | てい | た | だろう
 語根 結合価 態 相 時制 ムード (上原・熊代 2007: 187)

さらに次の例に見られるような「せ」と「られ」などの2形態素の順番を入れ換えると、非文、あるいはもとの形態素列とは違う別の意味を持つことを以て、形態素列が類像性の語順に従うと指摘している。

着|せ|られ|た → *着|られ|せ|た (上原・熊代 2007: 187)

このような文末における形態素の順序は、単に述部の構造というだけでなく、文全体の構造という観点から説明されてきた。例えば、仁田（1989:48）では、日本語の節の構造を次のように図示している。

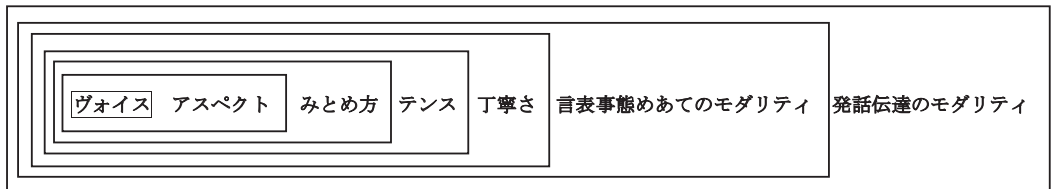
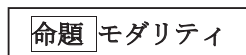


図 1³

本稿では、上原・熊代（2007）の形態素順序は、仁田（1989）で主張されている日本語の節構造を反映するものと解釈する。

仁田（2009）によると、日本語の基本的な意味—統語構造は、「命題」と「モダリティ」という質的に異なる二つの部分が存在し、モダリティが命題を包み込む、という層状の構造にあるものとしている。



命題とは「文の意味内容のうち客体化・対象化された出来事や事柄を表した部分」(同上:19)であり、モダリティとは「現実との関わりにおいて、発話時の話し手の立場からした、文の対象的な内容(命題内容)に対する捉え方、および、それらについての話し手の発話・伝達のあり方を表した部分」(同上:19)と規定づけている。どこまでが命題部で、どこからがモダリティと言えるかは諸説あるが、本稿では図1のような階層構造を持っているということ自体が重要であるため、ここでは議論しない。

2.3. 階層と形式

図1のような日本語の節の階層構造が認知的な根拠(類像性、関連性)に基づくと考えた場合、重要なのは、日本語において、これらのテンスやモダリティといった文法カテゴリーが、前接する品詞とその活用形も規定しているということである。

例えば、アスペクト形式(ここでは「ている」)には通常動詞の連用形が前接し、名詞や動詞の終止形などは認められないし、モダリティ形式(ここでは「らしい/ようだ」)の場合、終止形が前接する(「らしい」においては名詞も)が、動詞の連用形は前接しない。

- (4) a. 彼は今、ご飯を食べている。
b. *彼は今、ご飯を食べるている。
c. *彼は今、ご飯ている。 (作例)
- (5) a. 彼は今から、学校に行くらしい/ようだ。
b. *彼は今から、学校に行きらしい/ようだ。 (作例)

活用形の意義については、北原(1981)に指摘がある。北原(1981:407)は連用形に下接することの意味として、「すでに成立した事態としての動作について表現されるもの」と述べている。また、北原(1981:394)では、「らしい」、伝聞の「そうだ」「そうです」が終止形に下接する理由として、「終止形がそこで一応叙述を終止する形だからである」とし、「らしい」が非活用語(名詞)に下接する理由として「体言が終止する職能を具有しうること、つまり体言はそれだけで終止形相当になりうるものであることが、その理由である」と述べている。

つまり、ある意味機能と形式の結びつきは恣意的なものではなく、一定の傾向があるということである。上記の例では、アスペクトと[文(V連用形)＋ている]、モダリティと[文(終止形・N)＋らしい]は意味と形式のペアになっていると考えられる。

3. 構文スキーマに基づく理論

3.1. 構文とは

構文(construction)はGoldberg(1995:4)⁴⁾に従えば、以下の通りである。

「Cが形式と意味の対応物 (F_i,S_i) をなし、F_iまたは S_iのある側面が Cの構成要素から、または他の既に確立した構文から、厳密に予測することができない場合、そしてその場合に限り、Cは「構文」である。」(訳：児玉・野沢 2009: 47)

このように定義された構文であるが、Goldberg (2006: 5) では次のように修正されている。

「いかなる言語パターンも、形式あるいは機能のある側面が構成要素あるいは他の構文から厳密に予測できない場合、「構文」として認める。加えて、たとえ形式あるいは機能のある側面が、構成要素あるいは他の構文から完全に予測することができるとしても、そのパターンが高頻度で生起する場合には「構文」として認める。」(訳：児玉・野沢 2009: 47-48)

つまり、「構成性の原理」に従う場合も、言い換えると、完全に分析的と思われるような場合にも構文として認められる。本稿では、この考えに基づき、上に述べた [文 (V連用形) +ている]、[文 (終止形・N) +らしい] などにも広く構文として扱うこととする。

3.2. 構文スキーマ

構文とは Langacker (2008) ⁵では、「言語表現と合成パターン」のことであり、特に、「合成パターンは構文でもあり、スキーマ的でもあるため、必然的に構文スキーマと呼ばれる。構文スキーマはスキーマ化を経て習得される。スキーマ化とは、何度も使用される表現に共通して見られる組織的な特徴が骨格のように抽象化されることである。スキーマは、一旦学習されると、そのパターンに基づいて作られる新しい表現を使用したり、理解したりする際のテンプレートとなる」(訳：山梨 2011: 212) と述べられている。

さらに、スキーマは具体的なものから抽象的なものまで、様々なレベルで抽出されネットワークを作る。本稿で扱う推量のモダリティ助動詞の使用 (ここでは「らしい」「ようだ」の場合) について、主に形式的な側面に注目してスキーマのネットワークを図示すると、以下ようになる。

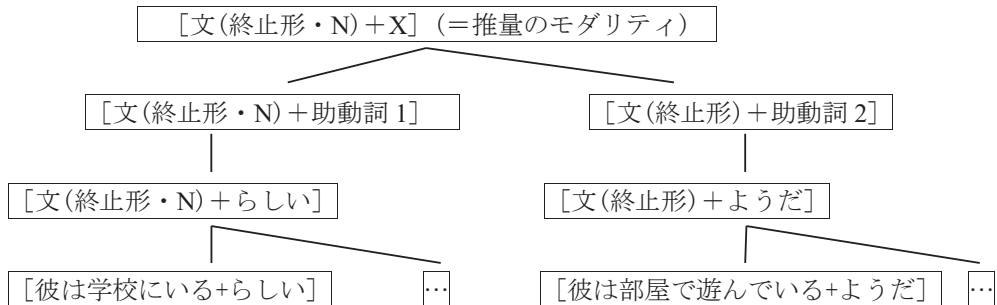


図 2

ただし、ここでの助動詞 1 は「接尾辞」、助動詞 2 は「名詞 (だ)」と、それぞれ同じ形式であることには注意を払う必要がある。

3.3. Usage-based Model に基づくアプローチ

Langacker は一連の研究で、Usage-based Model を基盤にした言語観を唱えている。山梨 (2009:135) の言葉を用いると、「用法基盤のアプローチでは、認知主体の言語使用や言葉の習得過程にかかわるボトムアップ的アプローチを重視する。このアプローチでは、言語現象の規定に際し、まず具体的な言語事例の定着度、慣用度との関連でスキーマを抽出していくプロセスに注目し、この抽出されたスキーマとの関連で他の具体事例の一般化を図っていく。また、このスキーマに適合しない事例が出現した場合には、スキーマの動的な拡張のプロセスとの関連で新しい事例の適否を規定していくという、言語使用を重視したアプローチを取る。」

このモデルは先行研究での尾谷 (2005) の指摘に従うと、意味用法として接尾辞の時の意味用法から推量用法への変化は説明できるが、前接部がどうして語のレベルから文 (節) のレベルに拡張したのかは説明に窮するのである。

そこで尾谷は類推という手段を用いて、文 (節) レベルの接続が可能になった経緯を示すのであるが、本稿では、形式的な側面からも用法基盤的なアプローチと先に述べた構文スキーマを用いて説明が可能であると考えられる。

ここでは「ばい」を取り上げて説明する。接尾辞としての「ばい」は名詞、動詞連用形、形容詞、形容動詞、その他 (尾谷 2005 の規定に従い、「とっばい」「湿っばい」など) が前接要素として使用される。そこで、形式に関してもスキーマが抽出されると考える。それは以下のようなものである。

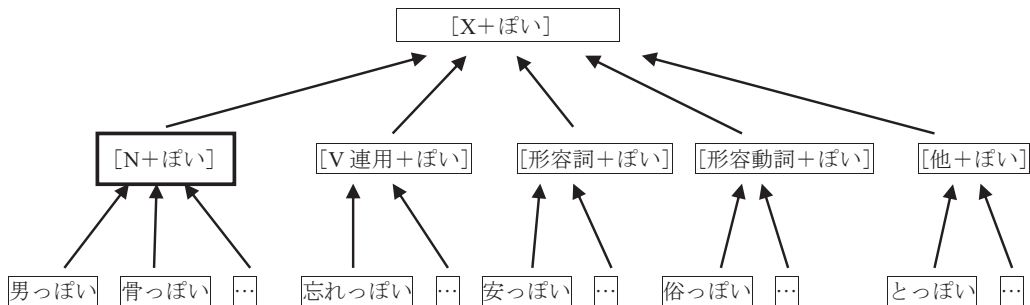


図 3

ただし、定着度の面で見ると、これらの形式のスキーマは等価ではない。すでに尾谷で指摘されているように、名詞において、接尾辞「ばい」は生産性が高く、そして頻度も高いものと思われる。つまり、[N+ばい] は [V連用+ばい] などその他のスキーマに比べて、定着度が高いのである (太線で表現)。また裏を返せば、「忘れっばい」、「安っばい」などは抽象的な [V連用形+ばい]、[形容詞+ばい] ではなく、具体的な語彙として定着していると思われる。また、山下 (1995:203) では「ばい」「らしい」「くさい」の比較をし、その共通点として「特に名詞に結合して多様な臨時的派生語を造語すること」が指

摘されており、「らしい」「くさい」についても [N+らしい] [N+くさい] のスキーマの定着度が高いことが窺える。

3.4. 構文スキーマによる「引きつけ」

ここで図2を見てみる。日本語使用者の言語知識には図2における、[文(終止形・N)+X] = 「推量のモダリティ」というような形式と意味のペアが「らしい」などの先例によって成立していると考えられる。

「男っばい」「骨っばい」などの使用頻度が高まると、[N+ばい] というスキーマの定着度が高まる。

その際、図2における構文スキーマ [文(終止形・N)+助動詞1] が活性化される。それは、助動詞1が形式的には接尾辞と変わらず、また前接要素が名詞であるという点で共通しているからである。

なお、この際、活性化する構文スキーマはより上位レベルのスキーマ [文(終止形・N)+X] ではなく、下位レベルのスキーマである [文(終止形・N)+助動詞1] の可能性が高い。Langacker (2008) では、下位レベルのスキーマは、上位レベルのスキーマとの競合において、完全に定着しており、多くの状況で経験され、具体的という点で、本質的に有利であると述べられているからである。

そして、[文(終止形・N)+助動詞1] に「引きつけ」⁶られる形で [N+ばい] (6) から [文(N)+ばい] (7a)、そして [文(終止形)+ばい] (7b) への形式的拡張が起こると考えることができる。つまり、再解釈され前接要素に文レベルを許すようになるのである。

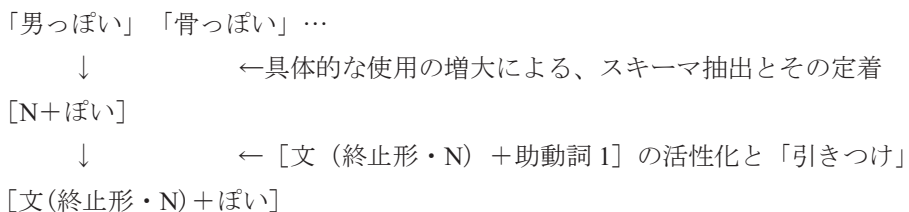
(6) ([N+ばい] の事例)

もう20歳なのに、友達と喧嘩したから大学に行かないなんて、あいつは本当に子供っばい。
(作例)

(7) ([文(終止形・N)+助動詞1] の事例)

- a. (遠くにいる人を見て) 背丈や服装からすると、どうやらあそこにいるのは子供っばい。
(作例)
- b. 彼女がどうやら浮気してるっばい。
(1c)再掲

以下に拡張の進行過程を示す。



3.5. 類推との関連

ここまでは、構文スキーマによって形式が引きつけられる現象について、「ぼい」を対象に取り上げてきた。この時、結局は以前に使用された「らしい」に基づく「ぼい」の拡張という意味では類推と大差ないという批判があるかもしれない。しかし、これは(正確にはどちらが先かは明らかではないが)次の「くさい」の拡張を考える際には重要な違いを生じる。「くさい」がモダリティ助動詞への拡張を起す際、類推による説明では、具体的に「らしい」あるいは「ぼい」を選び、比較しなければならなくなる。すなわち、類推の場合、同じケースが増えるほど、実際に何をモデルにしたのかがわかりにくくなるのである。一方、本稿の議論に従えば、話者の言語知識の中で同じケースが増えたところで、蓄えられるのは[文(終止形・N)+助動詞1]という一つの構文スキーマであるため、それを参照して拡張が起きると考えればそのような問題は生じない。さらに同じケースが増えるにつれて、構文スキーマが定着し、その構文が引きつける力はさらに強くなっていくと考えられるが、正確な時期は特定できないものの、「らしい」に比べて「ぼい」「くさい」の変化が起きた時期が程近いという事実は、構文スキーマがより定着したためと考えれば無理なく説明される。

一方、尾谷(2005)は類推のモデルの選定に意味の類似を挙げている。確かに、名詞接続が可能な全ての接尾辞が同じようにモダリティ助動詞に至る、つまり、[文(終止形・N)+助動詞1]を持つようになるわけではない点を考えれば、根元的な変化の起点はやはり元々の意味にあることは疑い得ない(例えば「伸縮性」などにおける「-性」が「学校に行った性だ。」のように用いられるようにはならない)。しかし、本稿で主張した[文(終止形・N)+助動詞1]という構文スキーマは、必ずしも形式的な性質のみを持つものではなく、推量のモダリティという意味と結びついて成立しており、このような意味的な性質も拡張において参照されていると考えれば自然に説明が可能である。

3.6. 文末での使用

ここで注意しておきたいのは、説明の便宜上、スキーマを[N+ぼい]と表記しているが、実際の事例としては、名詞が前接するとしても、名詞化接尾辞「さ」を伴い、「子供っぼさが/を/に」など助詞を伴い文中で使われる場合、また、「子供っぼい服」のように装定用法として語中に用いられる場合もあるということである。しかし、ターゲットとなるモダリティ助動詞が基本的には「文中の要素」や、装定用法として「語中の要素」に用いられないという性質上、直接変化の起点となった形式的なスキーマは次のような「文末」で用いられた事例から抽出されたものとするのが自然だろう。

- (8) もう20歳なのに、友達と喧嘩したから大学に行かないなんて、あいつは本当に子供っぼい。((6a)再掲)
- (9) この魚ちょっと骨っぼいね。(作例)

(10) このジュースの味、ちょっと薬っぽい。

(作例)

4. 形式名詞への適用

本稿では紙幅の都合上詳しく取り上げないが、例えば「よう」のような形式名詞からモダリティ助動詞への変化は、一見形式（どちらも前接要素が文単位であること）は変わっていないように見えるが、「名詞（よう）＋助動詞（だ）」が「助動詞（ようだ）」に再解釈されていると思われる。

青木（2011）は「ようだ」について、中古・中世の「連体節＋やう」にコピュラである「なり」が下接していたものが、近世以降は「ようだ」という機能語（本稿ではモダリティ助動詞）に変化したと述べている。構造の変化は下のようにまとめられている。

連体節：古典語：[[連体形（従属節）] +ヤウ] ナリ。

現代語：[連体形（主節）ヨウダ]。 (青木 2011: 185)

青木はこのような構造変化が起こる背景に述語が終止形という形態を捨ててしまったこと（「連体形終止の一般化」）を要因として挙げている。

この場合も再解釈が、先例などですでに成立した構文スキーマの引きつけによって促進されたという説明が可能であると思われる。ただし、「っぽい」と違い、活性化されるスキーマは[文（終止形）＋助動詞2]（助動詞2は「名詞（だ）」と同じ形式）である。このスキーマが活性化されるのは、助動詞2が形式的には「名詞（だ）」と変わらず、前接要素の連体修飾節もまた、文と同じ形式を持つからである。以下に拡張の進行過程を示す。

「彼は学校に行くようだ」「彼女は花をみるようだ」…

↓

←具体的な使用の増大による、スキーマ抽出とその定着

[連体修飾節＋よう+だ]

↓

←[文（終止）＋助動詞2]の活性化と「引きつけ」

[文（終止）＋ようだ]

5. おわりに

本稿では「っぽい」「らしい」「くさい」における接尾辞用法から推量のモダリティ助動詞の用法への意味拡張に伴う前接部の形式的な拡張に対し、「類推」という、具体的な例（非常に下位レベルのスキーマ）を介する方法ではなく、より上位のスキーマを通しての説明を試みた。具体的には既に定着した構文スキーマ（[文（終止形・N）＋助動詞1]）から、形式が引きつけられることが大きな要因であることを示した。また「よう」や「そう」などの形式名詞がモダリティ助動詞へと拡張する際の内部的な形式の変化にもこの理論が当てはまる可能性があることを示した。アスペクト形式など、他の文法カテゴリーへの変化に

についてもこの理論が適用できるかどうかは今後の課題としたい。

謝辞

本稿の執筆の過程で、法政大学の尾谷昌則先生に数多くの貴重なご意見をいただいた。記して感謝申し上げたい。ただし、残された誤りや問題点は全て筆者の責任である。

参考文献

- 青木博史(2011)「述部における名詞節の構造と変化」青木博史編『日本語文法の歴史と変化』175-194, くろしお出版。
- 上原聡・熊代文子(2007)『音韻・形態のメカニズム』(講座 認知言語学のフロンティア 1), 研究社。
- 尾谷昌則(2000)「接尾辞「ぼい」に潜むカテゴリー化のメカニズム—「女っぼいは女ですか?」」『日本言語学会第120回大会予稿集』168-173, 日本言語学会。
- 尾谷昌則(2005)「接尾辞ポイのモダリティ化」『日本語用論学会大会研究発表論文集』1, 17-24, 日本語用論学会。
- 尾谷昌則(2011)「5. 4. 3 ポイ構文—語レベルから文レベルの構文へ—」尾谷正則・二枝美津子『構文ネットワークと文法—認知文法論のアプローチ』(講座 認知言語学のフロンティア 2), 269-272, 研究社。
- 北原保雄(1981)『日本語助動詞の研究』大修館書店。
- ケキゼ タチアナ(2003)「「ぼい」の意味分析」『日本語教育』118, 27-36, 日本語教育学会。
- 小出慶一(2005)「接辞「～ぼい」の用法の広がり—「雪が降るっぼい」という表現はどのようにし成立したか—」『群馬県立女子大学紀要』26, 1-13, 群馬県立女子大学。
- 児玉一宏・野澤元(2009)『言語習得と用法基盤モデル』(講座 認知言語学のフロンティア 6) 研究社。
- 仁田義雄(1989)「文の構造」北原保雄編『日本語の文法・文体(上)』(講座日本語と日本語教育 第4巻), 25-52, 明治書院。
- 仁田義雄(2009)『日本語のモダリティとその周辺』ひつじ書房。
- 堀尾佳以(2015)「若者言葉にみられる言語変化に関する研究」九州大学博士論文。
- 三宅知宏(2005)「現代日本語における文法化: 内容語と機能語の連続性をめぐって」『日本語の研究』1(3), 61-76, 日本語学会。
- 村上昭子(1981)「接尾辞ラシイの成立」『国語学』124, 18-27, 国語学会。
- 山下喜代(1995)「形容詞接尾辞「-ぼい・-らしい・-くさい」について」『講座日本語教育』30, 183-206, 早稲田大学日本語研究教育センター。
- 山梨正明(2009)『認知構文論-文法のゲシュタルト性-』大修館書店。

- Bybee, J. L. (1985) "Diagrammatic Iconicity in Stem-inflection Relations." In John Haiman (ed.) *Iconicity in Syntax*, 11-47. John Benjamins.
- Goldberg, A. E. (1995) *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. University of Chicago Press.
- Goldberg, A. E. (2006) *Constructions at Work: The Nature of Generalization in Language*. Oxford University Press.
- Langacker, R. W. (1999) *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter.
- Langacker, R. W. (2008) *Cognitive Grammar: A Basic Introduction*. Oxford University Press.
(『認知文法序説』山梨正明監訳、研究社、2011)

¹ 本稿では語を前接させるものを接尾辞、句、節を前接させるものを助動詞と呼ぶことにする。

² 村上 (1981) で指摘されるように、接尾辞「らしい」の由来については諸説ある。本稿では、接尾辞「らしい」が古語の助動詞「らし」とは直接的に関係がないものと考えて議論を進める。

³ 原典では縦書きであるが、紙面の都合上、横書きにしている。

⁴ Goldberg (1995、2006) の日本語訳は児玉・野澤 (2009) による。

⁵ Langacker (2008) の日本語訳は山梨 (2011) による。

⁶ 尾谷 (2005) は「ぼい」の形式的な拡張において、「引っ張る」という語を用いている。つまり、「類推」という現象に引っ張られて形式的な拡張が起こったということであるが、ここでの「引きつけ」はそれとほぼ同じ、つまり、すでに成立している構文スキーマという外的な存在に形式の拡張が誘因されること、という意味で使用している。